

南十字星

大阪大学外国語学部
(旧大阪外国語大学)
インドネシア語同窓会

2008年春 第6号

発行 南十字星会

連絡先 大阪府池田市五月丘 2-5-113-402

電話 Fax 072-753-1693

Email rocky3@wombat.zaq.ne.jp

金融関連事業で インドネシアとの縁深く

宮崎 衛夫 ('65卒)

昭和40年(1965年)の3月、大阪外国語大学インドネシア語科を20人の個性溢れる男たちとともに卒業しました。仲間たちは、メーカー、商社、銀行などそれぞれの道に進み、日本経済の高度成長期の真只中を突っ走り、バブル崩壊後の厳しさも体験してきました。今彼らと集い、昔を偲び、これからの人生を語り、共に杯を重ねる機会を得ることは無上の喜びです。私は幸いにしてインドネシアとの関わりを多く持てる仕事に就くことが出来ました。シンドイことも無かったわけではありませんが、今となればどれも楽しく貴重な経験ばかりです。紙面をお借りし、その一端を披露させていただきます。

最初のインドネシア

(1972年10月 - 1973年3月)

海外拠点を拡充していくという戦略を持つ三和銀行(現・三菱東京UFJ銀行)に就職しました。入行後7年を過ぎた1972年の10月、念願の海外、それもインドネシア勤務!の辞令を受けました。

当時インドネシアは経営基盤の脆弱な多くの小規模の民間商業銀行が乱立状態でした。政府は民間銀行の健全な発展を促進するため、これらの銀行に対し外国の銀行からアドバイザーを受け



める趣旨の大統領令を交付して頂きました。そこで、ビジネスチャンスとばかり、日・米・欧の主要銀行がジャカルタ詣でをし、対象とする銀行の奪い合いになったのです。

このような状況の中、スーツケース一杯のレポート用紙・ボールペンなどの事務用品、常備薬を抱えクマヨラン空港に降り立ちました。赴任の翌日から、上司とともに候補銀行を10数行訪問し、その経営陣・財務内容・ライバル銀行の動向などを調べるわけです。困ったことに、専門であったはずのインドネシア語が挨拶程度しか通じなくて、また彼らの使う英語もなかなか聞き取れません。あとは得意の勘と度胸で面談記録を書き、上司から叱責をうけた苦い経験もありました。

仕事を離れては、Kota 境界のおびただしいベチャの賑わい、ココナツオイルの鼻をつく匂い、Puncak Pasへのドライブ。そして、大晦日にジャワ島西端の Merak Beachの月明かりの下で飲んだ Bir Bintang、Hayam Wurukにあった知る人ぞ知るナイトクラブ Blue Ocean など、走馬灯のごとく思い起こします。

紆余曲折はありましたが、華僑系の Bank Bali をパートナーと決定し、その後の交渉もスムーズに進みました。順調でなかったのは健康面です。それまでのホテル住まいから賃貸の家に移るべく探し始めていたときに、激務の影響か、ホテルインドネシアのプールの水が悪かったのか、「アメーバ赤痢」をこじらせてしまったのです。

Visit Indonesia Year に協賛してつくったポスター



ジャカルタの Sunda Kelapa 港。突き出した舳先が岸壁に並ぶ



ジャカルタの国立病院に入院しました。当然のことながら全てインドネシアスタイル。病室は広い中庭に面した個室でしたが、濁った水しか出ないカマル・マンディや下痢が続いている身に朝・昼・晩3度のインドネシア料理はなんとも厄介でした。肝心の治療も（後で分かったのですが）日本では使用禁止になっている強力な注射や、腸の中をかき回す荒っぽい手当ても受けました。

日本での再治療のためいったん帰国。すぐにもジャカルタに戻るつもりでしたが、代替りのスタッフが急きよ送られ、私は捲土重来を期して日本に残ることになりました。その後、1975年から80年まではインドネシアではなく、香港支店勤務です。

ジャカルタ駐在時代（1989年4月 - 92年10月）

香港から帰国後の9年間は国内勤務が続きましたが、1989年春になって、突然インドネシア勤務の辞令が出ました。今回は同国の金融の規制緩和策の流れの中での新しい商業銀行設立の仕事です。「ゼロからのスタート」であり、当局との交渉や、営業・事務などの組織づくり、現地行員の採用などの合間を縫って、日系各社や、現地有力者への挨拶回りなどに忙殺されました。

なにごとくも“Kira-kira”の国民性。銀行設立に向けてきめ細かいスケジュールを立てていても、なかなか思うように進みません。小切手ほかの帳票類の作成・印刷で何度やり直したことが。オフィスに電話線が届けば長さが足りない。きちんと手続きを踏んで採用したはずなのに元の雇い主からハイジャックされたと言って大変な剣幕で怒鳴られたり、監督官庁からの気まぐれな要請で右往左往したり。まさにドタバタ劇の連続です。新しいものをつくり上げる喜びがあればこそ、踏ん張れたのだと思います。



Banjarmasinの合板工場。貯木場での作業

開設後は、日系のみならず、地場の優良企業とも取引ができ、多くの有能な人たちと接する機会を得たのは、本当に良かったと思います。合板、繊維、縫製、木工製品などの工場見学の機会も多く、スマトラ、カリマンタン、スラウェシ、イリアンジャヤなどに出張。貴重な経験となりました。数々の問題を抱えながらも比較的順調

なインドネシア経済のおかげで3年半楽しく刺激的な仕事に従事。私のサラリーマン生活の中でも特筆すべき“熱く思い出深い”時期でした。

年10回の出張時代（94年6月 - 2006年6月）

1994年に子会社の三和総合研究所（現・三菱UFJリサーチ&コンサルティング）に移り、国際業務を担当しアジアの事業に注目。ビジネスへの期待と私の個人的思い入れ（？）からインドネシアに子会社をつくり、企業向けの経営コンサルティングと政府相手のODAのソフト分野の仕事に力を入れました。当時は毎月のようにジャカルタへの出張です。スハルト退陣前後の政治・社会の混乱や、97年のアジア金融危機に端を発する華僑中心の経済界の未曾有な破綻などを目の当たりにし、この国には何が必要なのか、何を為すべきか。議論を重ねてきました。

銀行のローンリスク管理（日本の金融界の失敗から学ぶ）、非効率な国営企業の民営化計画、地方分権に伴う財政管理。これらインドネシア政府に対する政策提言などで、少しはお役に立てたところもあったのではと、ひそかに自負しております。

終わりに

長い混乱の時期を経て、このところインドネシアの状況も改善の兆しが見え始め、外国からの直接投資も増加傾向にあります。今年は、日本・インドネシア国交樹立50周年。次の50年に向けてインドネシアの安定的成長と、日伊関係の更なる発展を期待しています。

Pokoknya, Asyik Kan?

坂井 美穂 ('06 卒)

大阪大学大学院言語社会研究科

2001年に大阪外国語大学インドネシア語専攻に入学してからすでに7年が経ち、気がつけば同期の友人たちはすでに社会人として活躍している中、まだ私は懲りずに細々とインドネシアに関わり続けています。現役院生(最後の外大インドネシア語科修士?)として今回初めてこのコラムに登場するというので、院生らしい(無理ですが)私自身の一側面、そしてそんな人物からみたインドネシアの一側面をみなさんに紹介できたらと思い、筆を執っています。



「なぜインドネシアなの?」と学部頃はよく尋ねられたのを思い出します。大学受験の頃に東ティモール問題をニュースで観たのがきっかけとなり、アジア、特にインドネシアの社会問題に興味をもち、今に至ります。

3回生の後期から1年休学をし、プキティンギ(西スマトラ州)とプカンバル(リアウ州)にNGOのインターンという形で滞在しました。この2つの州の境界に、日本からの資金や技術で建設されたダムが現地コミュニティの生活を破壊してしまったということを知り、実際にそれを目にした後に、無謀にも現地に飛び込み



フィールドワークの光景、後ろ姿が筆者



インドネシア女性活動家全国大会で、歌を披露するパプアの女性たち

ました。帰国後もインドネシアや東京に行ったり来たりで、授業にはほとんど出席せずに学部を卒業してしまいました。(そこはやはり寛大な教授陣のおかげだと大変感謝しています!)

最初、明日食べることもままならない人たちの生活を目の当たりにした際、非常に衝撃を受けたことを覚えています。先祖代々受け継がれた豊かな土地や、伝統、文化 これらはダムの底に沈められてしまったと言っても過言ではありません。新しい移転先には、濁った水の井戸やアスベストの屋根を使用した簡素な小屋、整備されていないゴム園などが代わりに用意されていたそうです。修理や整備のための費用が工面できない世帯は、いまだにこういった状況で生活しており、そのような世帯は決して少なくはないのが現状です。

「所詮アウトサイダーの日本人のくせに」と言われ涙したこともあります。自分がしなければいけないことは何か、とこれまでやってきました。インドネシア国内だけでなく、タイやフィリピン、インドなどでのフォーラムにも出席しましたが、やはり大事なのは、自分が実際に見、聞き、感じてきたことを伝え、相手に分かってもらうことだと思います。同じ日本人同士でも苦労することなのですが、これまでのことを伝えたいという思いから、絵本を出版するという機会にも恵まれました。



Pokoknya, asyik kan? (関西弁で言えば「要はおもしろいやんか?」という感じでしょうか) - これまで外大のインドネシア語専攻だったから、そしてこれからもそれを誇りにやっていくから - まだまだ asyik なことがたくさん待ち構えているような気がします。

Hidup lama, Gaidai!



キャンパス便り

大阪大学大学院
国際公共政策研究科 教授 松野 明久
(外国語学部インドネシア語専攻担当教員)



阪大との統合

2007年10月1日、外大と阪大は統合され「新しい大阪大学」として出発した。新生阪大は吹田、豊中、箕面と3つのキャンパスをもち、11学部、15研究科、5研究所を擁する巨大な組織となった。学生数は19,942人(平成18年5月)で国立大学法人としては3位。役員・教職員数は4位。科学研究費補助金受入においては件数・金額とも4位。予算規模は1,084億円(平成19年度)。今までこじんまり、のんびりとやってきた外大からすると、大山を見上げるかのようだ。

旧外大教員は、概略的に言うと、地域言語文化系教員は言語文化研究科(とくに言語社会専攻)と世界言語研究センター、言語理論・文学系教員は文学研究科(とくに文化動態論専攻)、地域研究・開発環境系教員は人間科学研究科(とくにグローバル人間学専攻)、法政・国際関係系教員は法学研究科と国際公共政策研究

科に所属となった。また中国経済・社会研究者は経済学研究科、国際協力をめざす教員はグローバルコラボレーションセンター、地域連携を考える教員はコミュニケーションデザイン・センターに所属となった。留学生を教育する日本語日本文化教育センターはそのまま残った。

これらは多くの場合、既存の組織の再編・拡大であるが、グローバルコラボレーションセンター(略称グロコル GLOCOL)は、阪大・外大の国際協力分野の力を外向けに打ち出すセンターとして、新しい構想の下に設置された。現在の所長はアフリカの紛争研究で知られる栗本英世教授(社会人類学)。理系教員も多く参加し、先端技術分野の交流や人間の安全保障をテーマにした共同研究を推進していく。私も兼任で関わることになった。

身の回りの変化

さて、教員と学生はどうなるのだろうか。

何人かの学生が研究室に来て「先生は4月から豊中キャンパスに移ると聞いたんですが本当ですか」と聞いた。「そんなことはない。それは3、4年先。今の学生が卒業するまでちゃんとやるから」と答えるのだが、不安の雲は箕面の学生たちを覆っている。カリキュラムは旧課程の学生には保証される。ただ、留年・留学・休学などの場合、少し事情は違って来るかも知れない。

クラブ活動も、統合されひとつになるところもあれ

ば、箕面キャンパスだけで継続するところもある。しかし、箕面は4月から1年生がいないキャンパスとなり、縮小は避けられない。

語劇はどうなるのだろうかと思う。阪大には、春のいちよう祭(今年は5月2日)と秋の大学祭(まちかね祭:11月1-3日)がある。語劇をやるとしたら後者だろうが、箕面キャンパスは大学祭をどうするのか、気になるところだ。



07年の語劇は10月28日に「ジャカ・タルブと7人の天女」を熟演した。内容はインドネシア版の「羽衣伝説」。カラフルな衣装が映えた。㊤その1場面。㊦フィナーレの出演者あいさつ



毎年やってきた農村ホームステイも今後は難しくなる。私の場合、外国語学部の授業が減り、本務である法学部の授業が中心になるからだ。村の人たちはもっとたくさん来て欲しいと言っているが、学生数が減るのでそれにも応えられない。学生がインドネシアとじかにふれあうチャンスをどう確保するか。新たな課題となる。

私自身は、この半年月に2度ぐらいのペースで国際公共政策研究科のある豊中キャンパスに行っていたが、4月からは毎週になる。研究科は研究に大きなウェイトがあり、外大にはなかった研究支援体制があって、資料・データ、計画立案・実施といった面の事務が強化されている。また、事務処理のIT化が進んでいて効率がいい。

実は、まだタクシーにのっても「阪大外国語学部」とずっと言えない。ついつい「外大、お願いします」などと言ってしまふ。それで運転手さんの反応を見て、

07年9月のスダダ農村ホームステイ。初めてプールへ。川の水を利用して冷たい！5分と入っていらなかった



「今では阪大ですが」などと照れて付け足したりする。先日も、NHKの国際ラジオ放送で、アナウンサーが「Professor Matsuno, Osaka University of Foreign Studies」などと言ったが、「ま、いいか」と受け流した。着慣れた普段着のように、馴染んでしまっているのだ。

調査研究・国際協力

私はこのところ2つのテーマを考えている。

ひとつは、インドネシアの1965-66年の激動(いわゆる9.30事件とその後)の今日的動向だ。さながら時効間近の未解決難事件の様相を呈しているが、私はそれが今日のインドネシア社会、とくにその精神・思想状況においてもつ意味を考えている。あまり語りたがらない割には、次々とでる出版物。政治の場でジグザグを続ける和解。歴史教科書改訂。1998年の「改革」は明らかに政治・経済・文化・社会の総合的なターニング・ポイントだったが、新たな再生への展望は見えていない。この大きな空白の時代、民族史を「振り返る」作業が深く静かに進行している。

もうひとつは、東ティモールの緊急課題だ。2006年の危機以後、これまで国際社会がモデル・ケースとして実施してきた東ティモールの国造り・平和構築が見直されている。私は、国際社会の支援が国家セクター、とりわけ中央政



社会連帯省児童保護課の建物オープン式で、子供たちが歓迎のダンス(07年12月)

府機構と首都機能の整備に集中したため、機能する民主主義を確立するための広範な社会的基盤の整備が遅れたと考えている。そのため、強力な国家セクターが出現し、それを手にした政権は一党支配体制を容易に築くことができた。それが政治のダイナミズムを失わせ、チャンネルのなくなった不満は暴力的に噴出した。

そういう東ティモールに、私はJICAの派遣で足を運び、社会連帯省(日本の厚生労働省)で福祉政策をつくるための基礎データを整理している。独立して6年になるが、この国には制度としての福祉がほとんどない。障害者、寡婦、要保護児童、高齢者など、紛争と貧困がダブルパンチとなって支援を必要とする人々は少なくない。まさに社会が社会であるその基礎として

「連帯」は重要だし、紛争後の社会復興という文脈ではなおさらだ。その名を冠した役所として、がんばってほしいと思う。



東ティモールで障害者支援団体を訪問。手でこぐ車イスを米人ボランティアがつくっていた。資金不足が悩み...

ミルヤンティ・サフィトリ・エリアス教授 Miryanthi Savitri Elias

Pada Program Studi Bahasa Indonesia, saya mengajar mata kuliah Percakapan (BI 2) dan Komposisi BI (BI3) untuk mahasiswa tahun pertama; Bahasa Indonesia 7 untuk tahun kedua; Bahasa Indonesia, dan Linguistik Indonesia Khusus yang merupakan mata kuliah pilihan untuk tahun ketiga dan keempat.

Selanjutnya, pada program pascasarjana, kuliah yang berkaitan dengan kajian sosial dan linguistik Indonesia diberikan selama dua jam dalam seminggu.

学生とのふれあい

学部のインドネシア語コースで私が担当しているのは、1年次の会話(インドネシア語2)、作文(インドネシア語3)、2年次のインドネシア語7、そして3・4年次のインドネシア語I、インドネシア語学特殊講義(選択科目)です。大学院で



は週2コマ、インドネシアの社会・言語学に関する授業をもっています。学部では理論的な学問というより実践的な外国語としてのインドネシア語の教育を行っています。そうすることで、学生から単なる私の質問に対する答えというのではなく、見解、疑問、提言といった内容のあるフィードバックがえられるのです。

【1年生】1年生の雰囲気は、まじめ、元気、初々しいといったところでしょうか。夢に見ていた「大学生の世界」に足を踏み入れたばかりですから理解できます。2007年度の入学者を見たとき、12人の女子に加え11人の男子がいたことに、とても驚きました。「今年はクラスの雰囲気がダイナミックになるだろう」と思いました。日本の女子学生はおとなしくて恥ずかしがり屋だからです。この原稿を書いている今日は2008年の2月3日で、学年末試験を採点したところです。私は結果に満足しています。以下に、彼らがどういう作文をしたか、その一端をお見せしましょう。

「スシロ・バンバン・ユドヨノ」(中川怜香)

2007年10月29日、インドネシアの大統領であるスシロ・バンバン・ユドヨノが初めてCDをリリースした。そのCDに収められた歌は、愛や宗教といったものをテーマにしている。もし、日本で福田首相がユドヨノのようなCDをリリースしたら、日本人は怒るだろう。なぜなら首相の第一の仕事は政治だから。もしユドヨノが日本の首相になったら、日本も面白くなるだろう。みなさんは、そのCDを買いたいと思う?

【インドネシア語劇】07年の語劇は「ジャカ・タルブと7人の天女」というもので、観客を十分に魅了しました。2年生は完璧な上演に仕上げようと、当日まで練習。先生たちの指導もあって成功裡に終わり、一同ほっとしました。その

Wujud pengajaran pada program sarjana, saya lebih cenderung memilih pengajaran BI (sebagai bahasa asing) yang bersifat praktis, alih-alih sebagai sebuah ilmu yang bersifat teoretis.

Dengan cara itu saya mendapat umpan balik yang lebih kaya dari para mahasiswa, tidak hanya berupa jawaban atas pertanyaan saya, tetapi juga tanggapan, pertanyaan, dan usulan.

プロフィール 1981年インドネシア大学文学部言語学科卒業。96年ソウル女子大学朝鮮語・朝鮮文学博士課程修了。文学博士。インドネシア大学で言語学、心理言語学、神経言語学、朝鮮語を指導。韓国外国語大学の客員講師を経て2003年4月から大阪外国語大学に。

成功ぶりは、大阪以外の場所に住む何人かから私の耳にまで届いたことから伺えます(うぬぼれではなく)。

【「新しい」世界】「先生！就職決まりました。4月からジェイエア(J-AIR)で働きます！」。4年の女子学生がうれしいニュースを伝えてきました。「私も、先生！旅行社に決まりました」と別の学生。就職が決まった話を聞くたびに、私はとてもうれしくなり、感謝の気持ちで一杯になります。

おめでとう。みなさんのこれからの人生の場となる「新しい」世界が始まるのです。

【一緒に料理を】最後に書きたいエピソードは、1年生数名が私の住む宿舎(小野原東5丁目)で一緒にインドネシア料理をつくったときの事です。次の学生の文章には、初めて外国人の教師と勉強した印象が綴られています。

《藤田郁美》私はサフィトリ先生や友達と一緒にインドネシアの料理づくりをして、とても楽しかった。私がこの前の夏インドネシアで食べたものとは違って。先生のおいしく、日本人により合っているように感じられた。先生は私たちのことを思ってほんのちょっとしか唐辛子を使わなかったのだろう。そうですか、先生？ 私は、インドネシア語を学ぶ際、こうした料理をする機会があることはとてもいいことだと思う。インドネシア料理をつくることを通じて文化を学ぶことができるからだ。

《西岡郁恵》いろいろなインドネシア料理を食べることができてうれしかった。インドネシア料理は少し辛い、とてもおいしい！一番好きだったのはミー・ゴレン(焼きそば)。ミー・ゴレンづくりの私の仕事分担は、もやしのヒゲとり。大変だった！ひとつひとつとらなければならず、時間がかかった。おいしいミー・ゴレンをつくるには忍耐が必要だ。



箕面キャンパスでの私と学生のふれあいの一端をご紹介します。私は学生たちがどこへ巣立って行こうと、成功することを祈っています。「ガンバッテ クダサイ！」

《サフィトリ教授の文章・学生の作文も、冒頭部分のようなインドネシア語。紙面の都合で翻訳(=松野教授)を全文掲載しました》

寄稿

Apa & siapa

インドネシア 30 数年 「民」から「官」へ、そして...

泉 三郎 ('69 卒)

「レバラン」は30年余りで1周するという。商社の駐在員として、ジャカルタに初めて赴任したのが1975年10月、ちょうどレバラン休暇の真最中でした。そして今年2008年のレバランも10月です。「キラキラとサマサマ」という言葉、インドネシアの国と人を表わすキーワードの1つですが、当時本社の社内報に掲載された『駐在員便り』のタイトルが「キラキラとサマサマの国」でした。70年代のインドネシアには、まさにこの言葉通り、素朴でおおらかで、ゆったりとした時の流れがありました。一軒家住まいで隣組のインドネシア人とのゴトン・ロヨンの生活がありましたし、日本食材スーパーもなく、地場のパッサールでタオル・ムナワールを楽しみながらの買い物でした。今は大渋滞するステイルマン通りを、ベチャが悠々と横切っていました。

「キラキラとサマサマの国、再び」というタイトルで社内報に再登場したのは2回目のジャカルタ駐在の1989年でした。

スハルト体制は超安定期に入り、高度経済成長をエンジョイしていた時代でした。おかげでビジネスは動けば動くほど面白いほどにできました。

ジャカルタは高層ビル、高層アパートが林立する大都市に変貌していました。ただ、一步路地裏に入ると、そこには大都会の谷間のカンボンがあり、河川敷にはスラム街が連なり、開発から取り残された人たちの貧しい世界がありました。貧富の差はますます拡大。かつては貧しいながらも暢気で陽気な暮らしをしていた人々に、悲壮感が漂い、いつも目をぎらぎらさせて何かを狙っているような恐ろしさを感じられました。

3度目のインドネシア赴任は、98年5月暴動直後の7月でした。自分が言い出しっぺで設立した合弁会社、ご多分にもれずアジア経済危機で打たれ、会社の建て直しに出向となったものです。スハルト体制が崩壊して政情は混乱、通貨は1ドル2,200ルピアから15,000



イリアン・ジャヤ（現バブア）で、ダニ族の女性と

ルピアに暴落、預金金利は60% p.a.という異常な経済状態でした。

その後、2001年8月メガワティ政権誕生と時を同じくしてジェトロ・ジャカルタ事務所に出向。海外投資アドバイザーとして、日本企業の海外進出支援とインドネシアの投資環境改善支援が主な仕事でした。利益追求の「民」から公共サービスの「官」への転向は、大変有益な経験と多岐にわたる分野に多くの貴重な知己を得ることができました。とりわけ、日系の中小企業の集まり「SME 連合会」の事務局長として4年半、

毎月セミナーの企画・運営を行ったことは楽しく、やり甲斐がありました。そして06年2月、JJC（ジャカルタ・ジャパンプラブ）のペンリレーに「キラキラとサマサマの国、^{みたび}三度」を投稿してジャカルタを去りました。

2007年現役引退のあと、いつの日か「^{よたび}四度」の実現を夢見ていたときに JICA

調査案件の話をいただき、昨年から2年間「インドネシアの雇用サービス改善開発調査」チームの一員として再び「官」の仕事でインドネシアを往来するチャンスを得ました。インドネシアの公的職業紹介所の機能を高めて失業対策に資するというものですが、この調査を進める中で、実に多くの人たちがインフォーマルセクターで、最低賃金にも満たない手当てで日雇い労働を余儀なくされている実態を知りました。このような人々をどう救い、何をすべきか、という問題にも取り組みたいと思っています。

「民」から「官」に、そして今後は？ 30数年間のインドネシアとのつきあいは、すべていわば自分自身の生活のためでした。これからはお世話になったインドネシアへの恩返しとして、この次「サマサマとキラキラの国、^{こたび}五度」の際には、何か「ボランティア」的な活動にたずさわりたいと願っているこの頃です。



ブンガワン・ソロの作曲家グサン氏と。05年6月同氏宅で



増えてきた中間層

辻 和克 ('81 卒)

南十字星会のみなさま、こんにちは。

インドネシアでの仕事は今回が2回目、約4年半が経ちました。1989年から95年までの1回目の滞在との比較で、最近のインドネシアの現状について独断を交えて報告します。

都市の高級ショッピングセンターやマンションの数は今なおドンドン増え続けています。街を走っている車・オートバイは結構新しく、よく整備されています。その数は急増し、交通渋滞は大きな社会問題です。以前はもっと多くのポンコツ車が黒煙を巻き上げ走っていました。一流ホテルのレストラン・高級日本料理店にも極めて多くのインドネシアの人々が食事をしています。昔はほとんどが外国人で地元の人は数えるほどでした。

スラムの地域も大幅に縮小しています。都市で物乞いをする姿も減ったように見えるし、そもそも物乞いの「まわりつき」度合いにも変化があります。非常にあっさりして、お金をもらえないとわかるとさっさと引き上げて次を探しに行きます。以前のような切迫感が薄れています。それだけの「余裕」が出てきたということでしょうか。

地方都市にもちょっとした都会風のショッピングセンターやレストラン

が出てきて、街の一面は「小ジャカルタ化」してきています。以前は地元の小資本経営の店しかなかったのが、大手資本や海外資本の進出が見られます。

スハルト時代に比べて貧富の差が広がっているという人も多くいますが、それよりも、中間層が大きく膨らみ始めてきたと言った方がより正確だと思います。ひと昔ふた昔以前は、華人系を中心とするほんの一握りの金



ボロブドゥール遺跡で

持ちと大多数の貧しい人という構図で中間層の存在感がほとんどなかった。現在は、結構な数の中間層が、少数の金持ちと多数の貧しい人の間に大きな位置を占めつつあるように変わってきています。

ここで言う中間層とは、小さいながらも我が家を持ち中古の自家用車を手に入れて、時々一流レストランで食事をする。たまには欧米のブランド品を購入したり近隣アジアへ海外旅行をするといったイメージの人々です。かなりの無理をして、シンガポールかオーストラリアに子供を留学させるかもしれません。

この中間層は今までの大多数の貧しい人の中から育ってきたわけです。従来は、隣近所・親戚・友達など自分の周りにいる人々の生活レベルはみな大差なかったわけですが、この10年20年の間にその中からポツリポツ

リと頭ひとつふたつ抜け出てきた人達が出現し始めたということです。中間層の内容は、比較的高学歴の大手企業の管理職層、中小企業の従来型オーナー経営者、何らかの利権持っている政治家・官僚・ブローカーなどでしょうか。上昇志向の強い人々です。

いずれにしても、これが



ジャカルタのスティルマン通りに並ぶ高層ビル群

らのインドネシアの政治・経済・社会・文化を支え引っ張っていくのはこれらの中間層とその予備軍でしょう。

人口・国土・資源など大きな潜在力はあると言われ続けて数十年、それらを生かすも眠らすも彼らの意識と姿勢にかかっています。よその国の物まねではなく、インドネシアらしくその個性に満ちあふれた発展をしてほしいと思います。

寄稿

Apa & siapa

ジョクジャの骨董屋

石丸誠一 (75 卒)



2年生の春休み、友人とインドネシアを旅行することになった。外大インドネシア語学科の学生には、大きな喜びだった。香港、シンガポールを経てジャカルタへ。異文化に初めて触れた興奮はたえようもない。35年前に遡る旅の話だが、古美術に興味を持っていた私にとって、決して忘れられないことがある -。

ポロブドゥールの遺跡を見るため、ジョクジャカルタを訪れた。古い街並みを1人で散策中、偶然見つけた骨董屋。

「インドネシアにはベルタワーを飾った皿がある。きっと骨董屋で見つかるよ。骨董品好きの知人がそう言っていたのだ。

期待しながら店に入った。店内は薄暗く、香が焚かれ、静かで、ひんやりとしている。古めかしい彫像、皿、壺、仏像が陳列棚にきちんと並んでいる。絵画、書が壁に掛かり、年代物の硯箱や書籍棚も。冷静さを装い、入り口あたりの骨董品に目を向けた。しかし、それらしい皿は見当たらない。珍しい古美術品に目を奪われ、奥へ奥へと引き込まれて行った。

店主らしき人物がずっと奥に座って、無頓着のふりをし、煙草をふかしている。うるさくつきまとわず、客の好きにさせている。「手に取ってご覧ください。どうぞ!」と言わんばかりだ。ひょっとして、客に掘り出し物を見つけさせる才能があるのかも知れない。

陳列棚でつくられた通路は彼の席へと続いている。対話のできる距離になって初めて店主は煙草を置き、にこやかに挨拶をした。

彼は華僑。中国なまりの英語で話す。私は求めている皿の説明をした。すると、ちょっと考えていたかと思うと「倉庫へ行く」と言い、私を店内に1人残して姿を消した。

やがて、取り付け金具のついた1枚の皿を私の目の前に置いた。<これが、その皿なのか>私はそう思った。勧めるのが実にうまい。彼の流暢な弁舌は、私をその皿の虜にした。巧みな罠にはまってしまい、結局、私は大きくうなずいていた。



2枚の皿

④が本物の古伊万里



しかし、彼の骨董屋スピリットは、さらなる1枚の皿を背後から出してきた。それは、絵柄、素地が全く異なり、ひと目で他文化のものに分かる。

蜘蛛の巣にかかった虫と同然だった。彼の弁舌はますます冴え渡り、もう逃げることはできなかった。値段は「トモダチプライス?」で話がついた。2枚の皿を持って外に出ると、どこまでも青いインドネシアの空が目映った。

帰国して2枚の皿を、馴染みの骨董屋に持ち込んだ。ベルタワーを飾った皿は直径31㍎。白地。地は薄く、

指ではじくとコンと透き通った音が響き、地の堅さを感じさせる。鶴に囲まれた山水画が図案化され、紺の色彩で描かれている。

店員は「偽物です」とバツサリ言い切る。根拠を並べ立てた。説明を聞けば、その通り。納得せざるを得なかった。ショックだった。怒りを皿にぶつけたかったが、もう1枚をそっと差し出した。

2枚目の皿は直径35.5㍎。白地で重量感がある。草の絵柄。左右に大きく広がった葉と小さな実を結んでいる太い茎が弧をなし、皿の底から天に向かって伸び、濃淡の藍で描かれている。

店員は神経を集中し、皿の表、裏、すみずみまで目を配る。何度もはじき、コン、コンとにぶい音を確認、近くに寄せたり、遠目で見たり。そして「いいものですね。お売りになりますか?」。今度は本物だった。店員の申し出を丁重に断った。

1枚は産地・年代不明の偽物。はたして、インドネシアにベルタワーが存在したのだろうかと思う。もう1枚の皿は本物の古伊万里である。産地は九州・有田。つくられたのは江戸時代。恐らく日本との交易で海を渡ったのだろう。長い年月を経て日本に里帰りを果たした。今は私の部屋で静かな時を過ごしている。

2枚の皿。偽物と本物。どちらも私の宝物である。

懐かしい留学生活

舩田 奈己 ('03 卒)

在学中の2001年の春にジョグジャカルタのガジャマダ大学に留学するため、日本を出発しました。当時の旧姓は上坂です。あれから7年。早いもので私も1児の母になりました。インドネシアとは遠い世界で、仕事と育児と家事に明け暮れる毎日を過ごしています。

留学中のことは、今でもよく覚えています。到着してすぐ、ジョグジャカルタのたった1人の友人を頼り、コス(下宿)探しから各種手続きまで。たどたどしいインドネシア語で、けっこう度胸をつけたものです。

コスでは、入居した日にドキドキしながら皆に挨拶したのを、鮮明に思い出せます。

翌日の朝食はどこで食べたらいいのだろう…。それを聞こうと文章を考えながら居間へ下りて行くと、1人の学生がそこでテレビを見ていました。彼女に思い切って話しかけ、自己紹介からはじめると、彼女がどん

どんコスの住人に引き合わせてくれたのです。最後には私を取り囲んで、あれやこれやと質問攻めにあいました。

親切なおかかげで一気にコスに馴染むことができました。

「これ知ってる?」「食べたことある?」「行ったことは?」。いろいろ気遣い「Mau ikut?」とよく誘ってくれました。部屋を行き来して、インドネシア語を教えてもらいながらおしゃべりしたり、たまには運動をとバドミントンをしたり。テレビではその頃、日本のドラマ「ロングバケーション」をやっていました。一緒に画面を見ていて、吹き替えでインドネシア語を話すキムタクがとても新鮮でした。

習慣の違いにも出合いました。そのひとつが、自分の誕生日には人にご馳走しないといけないということです。幸せを分ける、という意味でしょうか。日本で



同じ下宿のインドネシア人の友人と。左端が筆者

は誕生日を迎える人にプレゼントしますが、インドネシアでは逆でした。

留学の後半は文学部の授業にも参加させてもらい、ますます友人が増えて楽しい毎日が続きました。授業の内容はよくわからなくても“友人に会いにキャンパスに行く”という日々。相手は自分のことを知っているけど、こちらはその人を知らない。そういう関係の人が随分たくさんいました。

今でもインドネシアとのつながりは多少なりとも保っています。“切れぬ縁”ですね。新婚旅行で行ったのがバリ島。そこで買い込んだガムランのCDを、自宅よく聞いています。また、会社の同期と誘い合って、

東京都内や横浜にあるインドネシア料理店を探し、食べ歩いています。輸入食品の店で bumbu(薬味)を買い、自宅で料理することもあります。

ジョグジャカル



ガジャマダ大学のキャンパス。後ろの赤い屋根の建物は講堂

夕はずいぶん変わったと聞きました。当時、学生 400Rp だった市バス料金も数倍になり、新しいモールもできているようです。その一方で、「よくこんな車が走るなぁ」と思っていたバスは、まだガタゴトとたくましく走っているのでしょう。

時間がゆったりと流れ、客を乗せずに自分が昼寝をしているベチャ引きのおじさん、バス停で砂糖たっぷりのお茶や揚げ物をおばさん、路地に入ればガムランの音や鶏の鳴き声が聞こえてくる風景が目には浮かびます。よく通ったワルン(店)はまだあるのでしょうか。また近いうちに、家族連れで遊びに行きたいものです。

消息・ひとこと

(敬称略)

藤原 剛 ('41卒) = 東京都港区

阪大との統合後も南十字星会がますます繁栄するよう祈ってやみません。

萩田幸雄 ('47卒) = 兵庫県西宮市

81歳になりましたが、老骨に鞭打って頑張っております。

原 勝利 ('50卒) = 千葉県佐倉市

第5号に寄稿されていた藤原剛様のことは、先輩からよく聞かされておりました。お元気なようですね。ますますのご健勝を祈念します。私も1月で83歳になりました。

小原義男 ('53卒) = 名古屋市市中村区

喜寿を過ぎましたが、インドネシア語生涯学習と尺八吹奏指導にまだまだ頑張ります。

西田達雄 ('60卒) = 東京都調布市

会報が同窓生以外にも読んでもらえれば…。配布先拡大を考えられてはいかがでしょうか。

竹中一良 ('63卒) = 埼玉県さいたま市

07年4月、さいたま新都心駅近くに引っ越ししました。皆様のご健勝と南十字星会の発展を祈ります。

大森靖彦 ('66卒) = 栃木県那須烏山市野上

ギャラリー「アートれい」をオープンしました。機会ありましたら、お立ち寄りください。

渡邊悠三 ('69卒) = 千葉県浦安市

水と緑の環境関連事業でまだ働いています。

中村由実 ('78卒) = 京都府宇治市

“大阪外大”消滅! ショックです。とてもさびしく思っております。会存続のため、会費制導入を希望します。

高木美和 ('90卒) = 高松市

皆様方の情報をお伝えくださって有難く感謝しております。

平岡 毅 ('94卒) = 京都市山科区

ついに統合されましたね。陸上部も統合され、二重に寂しいです。つながりはいろいろな形で残したいものです。

山田昌代 ('94卒) = 京都府宇治市

夫の転勤でNYへ。インドネシアがますます遠くなりますが、いつかインドネシア語を使う時があるでしょうか。外大の名前がなくなって寂しいです。

坂元祐 ('95卒)、坂元美和 ('94卒) = 京都市中京区

「南十字星」を楽しく拝見しております。いつも懐かしい記事、母校の空気を伝える記事、ありがとうございます。

関東支部

支部の懇親会を7月に開催します。別途案内予定。名簿更新していますので、新規登録、住所変更のさいはご一報をお願いします。(支部長: 朝倉俊雄)

Fax 045-366-1887 asakurat@ab.auone-net.jp)

ジャカルタ支部

日系企業の50社が集まる産業別懇談会というのがあり、08年の年頭セミナーに出席しました。「インドネシアの民主主義は、スハルト以降東南アジアの中では、最も進んでいる」。そんな大手銀行支店長のスピーチに対し、質疑が出ました。「貧困、教育、KNN(汚職・癒着・縁故主義)問題は遅々として解決せず、これが民主化か」と。体制派と現場派の見解の相違でしょう。「30年前と比べ街の外観は別にして、中身はそんなに変わっていない。民主化の前進は重戦車のようにゆっくりしている」というのが、小生の感想。皆さんはどう思われますか。(支部長: 内原正司)



仮面舞踊のさまざまな表情

ジャワ島チルボンの仮面舞踊トベン・チルボンに用いられる仮面です。

上段左からピンク色のルミャン、真っ白なパンジ、真っ赤なクラナ。下段は白に頭髪のあるパミンド、薄い赤色のトゥムンゲンとそれぞれ名がついています。

髭の2面は男性、他は男女の区別がありません。赤は荒々しい性格を表し、クラナは海の向こうの国ブランバングンの粗暴な王など、トゥムンゲンは大臣などの役柄に。白いものほど「洗練された」性格を表すとされています。

チルボンの舞踊は稲作農耕や人生儀礼などに際して上演。通常、ワヤンとセットで昼間に仮面舞踊、夜に影絵芝居となります。1人の踊り手が仮面を付け替えながら、その性格を表現していきます。

(福岡まどか准教授にご教示いただきました)

吉田 藍 ('99卒) = 大阪市淀川区

阪急・崇禅寺駅前にある「アジア図書館」のスタッフとして働いております。南十字星会や外大の先輩諸兄の会員様もいらしてインドネシア関連の講演会なども企画しており充実した日々をすごしています。

おくやみ申し上げます (07年秋以降判明の方々)

鶴原誠二 ('38卒) = 静岡県細江市 07年7月19日死去

河野節郎 ('46卒) = 兵庫県伊丹市 07年6月15日死去

高井洋一 ('53卒) = 大津市 07年2月死去

掛神 仁 ('57卒) = 奈良市 08年2月12日死去

投稿のお願い

「南十字星」の第7号は08年10月に刊行の予定です。投稿をお待ちしています。テーマ自由。原稿の長さは原則1200字程度です。メールならA4で1枚少々。カラー写真も添付してください。

あて先は、岩谷英志 (rocky3@wombat.zaq.ne.jp)

住所 〒563-0029 大阪府池田市五月丘2-5-113-402

郵送でも結構です。(Tel 072-753-1693)